

井深対談

母の顔はネガでも分かる新生児

ネガでも分かるママの顔！

井深 非常に説得力がありましたね、チェンバレンさんの本。

片山 はい。あの本のことで、早速ご質問いただきました件についてですけれども…。

井深 生まれてすぐ、お母さんの顔が分かるということ？

片山 はい。生まれたばかりの赤ちゃんが、お母さんの顔の写真を選び出せるという、あの話をチェンバレンさんに手紙で聞き合わせました。そのお返事によりますと、あれは、第3回出生前周産期心理学世界大会で、エジンバラ大学のトム・パウワーという方が発表したものなんだそうです。

井深 ああ、そうですか。

片山 ところが、その大元がはっきりしませんで、チェンバレンさんがパウワーさんに「どういう経緯である論文を書くことになったのか」と問い合わせてくださったんだそうです。そうしたら、「あれは、フロリダのティファニー・フィールドから聞いたものだ」と（笑い）

それで、トム・パウワーさんが今やっておられますのは、生まれて8秒後の赤ちゃんの、お乳を吸う速さで、テレビ画面にお母さんの顔が映るようになる装置なんだそうです。

井深 お乳を吸う速さでというのは、どういうこと？

片山 多分おっぱいを速く吸えばお母さんの顔が映って、ゆっくり吸えば、誰か別の人の顔が映るようになっている装置だと思うんです。それで、生まれて8秒後の赤ちゃんは、たちまち自分のサッキング（吸乳）の速さを調節して、お母さんの顔が映るようになれたというんですね。それをついこの間、聞きました。

井深 とにかく、赤ちゃんの学習のスピードって速いですね。

片山 生まれて8秒後ですから、驚いてしまいますね。

井深 8秒といたら、生まれて取り上げたらすぐのことですね。

片山 ということなんですね。

8秒というのが、あまりにも短い時間なので - 実験装置に入れている間に8秒ぐらい、すぐたちますからね - その辺の詳しいことはまだよく分からないんですけども。これは1991年7月に出生前周産期心理学の世界大会がアトランタでありましたんですけど、そこでパウワーさんが発表したそうです。

それから、その8秒後にお母さんが認識できた赤ちゃんは、12時間後には、お母さん

の顔がネガになっても、ちゃんと認識できたと・・・。

井深 ネガでも！？

片山 はい。ディファレント・カラーと書いてあるんですが、色が変わるんでしょうね。ネガでも、色が変わっても、ちゃんとお母さんの顔を認識できたんだそうです。

井深 12時間後！うーん、ネガで分かるというのはすごいな。

片山 大人は、ネガでは分かりませんよね。しかも、そこに至るまでにまだほんのちょっとしかお母さんに会っていないというんですね。授乳や何かの時に会ったきりなんでしょう。それで、井深先生のご質問が、チェンバレンさんにも気になっていたところであつたらしく、一生懸命調べてくださったようです。

井深 ああ、そうですか。どうもありがとうございます。

片山 公文教育研究会というところが、『誕生を記憶する子どもたち』にとっても興味を持ってくねまして、誕生時の調査をしてくれたんです。100人ぐらいのお母さんからアンケートをとって。

そうしたら、百何人かのうち、三十何例かが「覚えてました」と、その詳しい模様のアンケートが返ってきましたね。

井深 ある時期に、引っ張り出せばね。チェンバレンさんの本にも書いてあるでしょう。4つぐらいになると、だんだん消えてなくなっちゃうんですね。

片山 ええ。そのお子さん方は、「お魚だった」とか「広いお部屋の中に1人でいた」とか、いろんなことを答えていらっしゃるんですね。

井深 子供の年齢は、どれぐらいなんですか。

片山 2、3歳ぐらいですね。

井深 ああ、やっぱり4歳以前なんですね。

幼児開発協会でも、チェンバレンさんの本を読んで以来、「やっぱりそうだったんですね。人に話して笑われたから、それ以来ずっと黙ってたんですけど、うちの子は話した」というお母さんが随分います。

片山 そうなんですか、やはり。

井深 2歳前後の子のほとんどが聞けば話すみたいですよ。

片山 アンケートの中には、お母さんご自身の「私は、どうも胎児の時の記憶だったらしいものが、小さい頃、よくよみがえってきていて、あれは何だろうと思っていたんですよ」という報告もありましたね。

井深 ああ、そうですか。幼児開発協会のお母さんの中にも、小さい頃から偏頭痛があつて、それは、生まれる時、鉗子分娩で引っ張られたせいじゃないかと自分では思っていた。親に「鉗子分娩のせいだったんじゃないのか」と聞いても笑われちゃっていたけど、ほんとうにそうだったんだろうと思っているって。痛いという感覚が、きっと自分の中でずっと続いていて・・・。

片山 結びついたんですね。

井深 幼児開発協会の母親研究会の12期のお母さん方の子供はまだ2歳くらいですので、表現はあまりうまくできないんだけど、体で表現したり、言葉で言ったりと、どの子ども誕生前後への反応はありましたね。

それで、もう2歳を過ぎたお子さんに1人、一遍しか話してくれなかった子がいる。

片山 あ、それ、あるんですね。話が核心に触れてくると、すごくナーバスになって、「もう、お母さん、嫌、嫌」ってなっちゃうお子さんがいらっしゃるんだそうです。

それで、お母さんが、「もう、聞かない。ごめんなさいね」って、やっとなだめたんだけど、とつても機嫌が悪くなってしまった。いろいろな話をしながら聞いていたんだそうですけど、あるところから急に……。

井深 どういうことだろうな。ナーバスって。そのお子さんの出産には、何か問題があったんですか。

片山 ええ、あったんです。難産でとてもひどい仮死状態で生まれて、すぐに親から引き離されて、保育器に入れられて、それ以後、しばらく会えなかったんです。

井深 考えるだけで嫌だということかな。

片山 嫌だということは、そういうのに何か結びつくんでしょうね。

井深 いろいろな表現で話すんですね。「寒い寒い、熱い熱い」とか。生まれた時、寒くって、お風呂に入った時に熱かったんだろうかと、お母さんが順を追って聞いていいたら、「こっちのおっぱい」って触りに来たんだそうです。そういえば、確かに最初に右のおっぱいに、赤ちゃんの唇が触れた、とお母さんのほうが、思い当たることがいっぱい。

片山 お母さんのほうも、忘れていらっしゃることが多いんですね。それで、お子さんのお話から、「ああ、そうだった」と思われるらしいですね。「生まれた時に、緑の葉っぱと青い川があった」とお子さんが言われたんですって。よく考えてみたら、お医者様の手術着が緑色だったし、赤ちゃんを受け取るバスタオルみたいなのが青い色だったとか。

もう、ドッキリするような記憶ばかりなんですね。

井深 それだけ印象の強いことが残っているのかもしれないですね。

片山 そうですね。こんな話もあるんですよ。お子さんが「お父さんがお水を飲んで、お顔をベタベタふいてた」って言う。それは何だったかということ、産婦さんのためにタオルとお水が置いてあったんですって。立ち会い出産で、お父さんも興奮して、暑くなったので、お水を飲んで、タオルで顔をふかれたんですって。でも、それは絶対、赤ちゃんが生まれる3分か5分か前のことで子供は決して見ていないはずなのにおっしゃるんですね。

不思議な話もありますよ。お母さんが妊娠8ヵ月頃の時に、ご主人と高層ビルでお食事をなされた。その時に、高層ビルから眺めた、ライトがきれいだったんですって。お子さんに「お腹の中で何か見えた？」って聞いたら、「うん、見えたよ。高いビルのライトがきれいだった」と。そんなことは、もう長いこと忘れていたことで、子供にも話したことはない。ただ、お母さんにとって、そのライトのことは、妊娠中の思い出として、とつても印象に残ったことだったそうなんです。

井深 赤ちゃんには超能力的なものが非常にあると、私は思っているんですけどね。

片山 何か視覚的なものが伝わるのでしょうか。

井深 それが意識なんじゃないんですかね。

片山 じゃ、お母さんの意識から赤ちゃんの意識に伝わるとしか考えようがないですね。とても怖くなりますね（笑い）

井深 ご自分のお子さんに、聞いてごらんになったことがあります？

片山 私の子供は、もう既に13歳になってますので、そんなこと、思いも寄らなかったです。実は私の子供、ひどい仮死で生まれたんです。

井深 仮死で？

片山 はい。お産に11時間ぐらいかかりましてね。それで生まれた時、点数をつけて調べるんですよ、赤ちゃんに。皮膚の色が何点、自分で呼吸している、何点とか。10点からの減点法で3点だったという、大変ぐあいの悪い状態で、産声なんかもなく、しばらく見られませんでした。だからおそらく、いい思い出はないと思うんですけども…。そういう目で見ますと、小さい時からナーバスなところのある子供で、母親と離れたがらないとか、非常に恐怖心が強いんですね。ですから、今となっては、あまり聞きたくない、触れたくないという感じはいたしますけれども、催眠に入れて聞けば何か出るかもしれませんね。

イルカと赤ちゃんの交信

片山 これは、『鼻の中の羅針盤』というアメリカの新しい医学関係のおもしろ情報満載の本です（笑い）。これは『イルカの会議』という動物のほうの、やはりそういうおもしろい話なんですけれども、私が訳しましたものですので、お読みください。

井深 イルカが海中出産の手伝いをする、という話、ご存じですか。

片山 あ、そうらしいですね。

井深 前にソニーのインダストリアル・デザインをやっていて、今は出前専門の手打ちそば屋さんになった加藤晴之さんという人がいるんですが、その人が今、イルカに夢中になって、追っかけているんです。

ほんとに手伝うんだそうですよ。育児も手伝うし、出産も手伝うという…。

片山 アメリカでリパーシングというセラピーをしているサンドラ・レイという人がいますが、やはりイルカが海中出産を手伝う様子を見てとても感動していますね。パース・トラウマという、お産の時に赤ちゃんが受ける心理的な傷 - トラウマというのは傷なんです。主に精神の傷を言うわけですけども - その傷を、少しでも減らせる出産の形は何かと探っていますと、どうもそれが海中出産、水中出産らしいと。

井深 海中とは限らないわけだね。

片山 海中とは限らない。むしろ水中で、少し温度を温めて…。それが1番赤ちゃんのシヨッ

クや、精神的傷を減らせるんじゃないか、と言っていますね。それも、イルカの様子を見てからだそうです。

井深 ああ、そうですか。

片山 はい。

井深 じゃあ、実際にアメリカで水中出産をその方は実践しているわけですね。

片山 ええ、その幾つかの例が書いてある『アイデアル・バース』という本があります。でも、その本には、イルカが手伝う様子が克明には書いてないんです。ただ、そういう事実があって、それに感動して水中出産を試してみようというふうになった経緯が書いてあるわけです。何か人間と動物の共存というか、つながりというか、考えさせられますね。

井深 大変です。イルカが出産から育児も手伝うというんですもの。

加藤晴之さんは、ハワイでイルカと一緒に泳ぐツアーというのに参加したらしい。そこで彼は、イルカ 50 頭ぐらいとほんとにぶつかりそうぐらいそばで泳いだ。

今度、また別のツアーでフロリダ半島のほうに行くらしいんですけども、そこには、自閉症とか、過食、拒食とかの精神障害、それからダウン症なんかの障害を、イルカのヘルプで治すというようなことをやっているところがあるそうなんです。

イルカに関してはもう一つ、イゴール・チャイコフスキーという、黒海のクリミア半島で水中出産をやったソビエトの人がいますよね。普通だと、チャイコフスキーが海中出産をリードしていくわけなんですけど、それをやっている時にたまたまイルカがやって来て、そのお産をサポートしてくれたというレポートがあるそうです。朝日新聞にも載ったらしいです。とにかくイルカはテレパシーが使える、胎児と母親の潜在意識に語りかけて、三者で最良のお産の状況をつくり上げていくことができる。

イルカがちょうどコミュニケーターのような役をするんでしょうね。例えば、生まれ出てくる赤ちゃんに「怖くないよ、出ておいで、頑張っ」ということを、イルカが言ってくれる。そうしたベストの状況で生まれてきた赤ちゃんは、しばらく水中にとどまっているんだけど、おぼれることはない。へその緒からの酸素が肺呼吸に移行するのをイルカが感じとって、赤ちゃんを海面に押し上げてくれる。そのままいたら、酸欠になってしまいますけども、ぎりぎりのところで、ちゃんと海面から押し上げてくれるという話です。

アメリカの心理学で、深層の意識なんかを調べている人は、昔からイルカとの交信みたいなことを、随分盛んにやってますけれどもね。

一方で、イルカと交信するという胎児や新生児がどうやってそういう高い意識まで成長したかという問題が出てきますね。もちろん遺伝子によって成長するんだろうけど、非常に高い意識がなければ、チェンバレンさんみたいなことは言えないわけですよ。それを一体どう説明するか、もうちょっと突っ込んでいってほしいと思いますね。

片山 普通の私たち大人に比べて、赤ちゃんの能力がすごいんですね。次元が違うんでしょうか。

井深 そう、次元が違うんです。言葉の表現にならないだけで…。イルカの通訳でも何でもい

いから、非常に高い何かを持っているということが、もうちょっと証明できたら、教育のあり方なんていうのは、まるで違ったものにしなきゃならなくなると思うんですよね。

おむつ・サイン・コミュニケーション

片山 でも、やはりお医者様よりも、赤ちゃんを実際に見ているお母さんなら…。

井深 そうなんだ。お母さんが1番よく分かるんですよ。

話を聞くにしても、普通は2歳の子に、お医者さんが「覚えているか」って聞いたって絶対言わないですから。お医者さんが聞くというのは、大きくなって、それこそ催眠療法などから聞くことはできるかもしれないけど、ほんとうに自然に、純粹に聞き出せるのはやっぱり親だけですよ。

片山 そうですね。そして、親というものは不思議なもので、じっと子供のことをよく観察していると、他の人が思っている以上に、子供には何かあるんじゃないかという実感は確かに伝わってくるんですよ。

井深 それを協会では随分やっているんですよ。赤ちゃんのおむつを濡らさないで育てる…トイレット・コミュニケーションという名前をつけて。私が言い出したんだけど、赤ちゃんが生まれたら、なるべく早いうちに、何分たったらおむつが濡れるかを調べる。それは、人によってみんな違うんですよね。それで見てみると、赤ちゃんには必ずサインがあるんですよ。

片山 赤ちゃんが、今しましたよというサイン？

井深 しましたよというサインもあるし、出したいんですよというサインもあるしね。だからおむつに注意するということは、赤ちゃんのそのサインを理解させようという、そういうことなんですよ。そうするとサインが分かるまで、ほぼ1ヵ月。1ヵ月かからないお母さんもいますけど、1ヵ月やったら分かります。

それでやっていると、おむつがとれる、とれないよりも、子供が何を訴えているのかということをお母さんが非常によく分かるようになってっちゃう。

片山 赤ちゃんを四六時中しっかり見ることで、すごくその赤ちゃんが心、気持ちが通じるようになるんですね。

井深 赤ちゃんというのは、非常によくものを観察して、それで訴えようとしているわけで、それをしっかり受け止めれば、どんどんコミュニケーションというのは深くなっていくわけなんですよ。

だからトイレット・コミュニケーションという名前なんです、それは。完全に一度おむつがとれた子はいっぱいいるんですよ。

片山 ごく小さいうちに？

井深 ええ。だけど、それはだんだん大きくなってきて、他に興味をいっぱい持つようになると、教えるのを忘れちゃう。大体1歳近くなると、そうなりますよね。

片山 そうでしょうね。お母さんとの対話だけではなくるでしょうからね。でも、それだけ親密なコミュニケーションが小さい時からできるということなんですよ。

井深 そうなんです。それが非常に大事・・・。“気”の相互作用が起こっているようです。

片山 どこかで私たちは普通の人になっちゃっているわけですね。

井深 大人が浅はかな考えから、人間というのはこうあるべきだということで、その育ち方を変えちゃっているわけですよ。胎児や新生児は何にも分からない、何にも知らないという、その扱い方を大人はざんげしなきゃならない。

片山 非常に直感的な記憶であるとか、直感的な計算の能力であるとか、そういういろんな能力も、そのままだと学齢に達する頃には、みんな消えてしまうわけですね。

感覚にしても、目は見るもの、耳は聞くものというふうな固定観念では、とらえられなくなってしまうですよ。ほんとうに不思議な力・・・。

井深 『誕生を記憶する子どもたち』の翻訳をなさった時には、どんなふうにお感じになりましたか。

片山 まず、これが受け入れられるかどうか、とても心配だったですね。私はそれまで、記憶のこととか、心理学のこととかよく知らなかったものですから。

井深 受け入れられないでしょうね、まず、普通の人にはね。特にお医者さんとか、西洋医学の人には。

片山 そうなんです。それで、いろいろ出産のこと、赤ちゃんのこと、具体的なことが出てきますので、知り合いの産婦人科のお医者様なんかにはちょっとお聞きしました。「赤ちゃんがお腹の中で泣くって書いてありますけど、知ってます？」「とんでもない、そんなことありませんよ」とか、「あなた一体何をやっているんですか」とか言われまして、「これこれこういうこと」「そんなこと、信じられません」というぐあい、もう全然取り合ってもらえないという感じでした。だから、この本を翻訳しても、果たしてどういふふうに受け入れられるのかということは、非常に不安でした。でも、だんだんセラピーのこととか、トランスパーソナル心理学のこととか、勉強していきますうちに、今はもう既に、前世の記憶みたいなものでも、真剣に考えなくちゃいけない時代になっているということが、だんだん分かってきまして、私自身の頭の中が変わってきましたね。

井深 この本の中でサイコセラピーのことが、まず受け入れられないでしょうね、日本の場合は非常に遅れているから。

片山 そうかもしれませんね。

井深 アメリカじゃ、相当当たり前のことになってるんでしょう。

日本では、まだ催眠術といったようなものだからね。

片山 はい。もう、催眠ですら、日本ではまだまだのところがありますよね。でも、だんだん日本でも、呼吸法や何かで、昔の記憶をよみがえらせるとか、いろいろ・・・。

ようやく陽が当たり始めた・・・

井深 結局、“気”というものの考え方が革命を起こすでしょうね。今までのデカルトの科学パラダイムをひっくり返す手がかりになってくるのが“気”じゃないかと思うんですけど。

片山 何か、そういう転換の時期に来ているように思いましたね。

“気”について私はあまりよく知らないんですけども、人がほんとうに飛んでいってしまうぐらい強いエネルギーが出るとか…。

井深 いや、“気”というのはちょっとやさつものではなしに、肉体という物対心の、生命を形づけている、心の全部を“気”と称していいと思うんですよ。今言われた武道といったような、特殊なことだけが“気”じゃなしに、必ず肉体と前後、表裏一体になっている、そういうふうを考えていいと思うんですよ。だから、今までは物だけを中心にして、見える物、データが出ている物だけしか信用されなかったんだけど、その陰に隠れている“気”というものは大変なものだと…。

片山 そういう全体像が見えるようになりたいんですけども…。

井深 それにはまず、見なければ、読まなければ、信じられないということのを投げ捨てることじゃないですかね。事実の、現実の積み重ねというのをよく目を開いて見ていく。

片山 そうですね。実際にあることを自分の目で見て納得して…。

井深 だけど、見なければ納得できないというのは、それはもう科学パラダイム（笑い）

でも、赤ちゃんのことを考えると、何か信じる、分かるような気になりませんか？今度のような本を訳されたりして。

片山 そうですね。赤ちゃんが別物だということは感じますね、すごく。教育されて成長した人間とは全く別の存在であると…。そして、その赤ちゃんの特別なものが消えてしまうのが、とても残念な感じがいたしますね。それが人間の力として引き継いでいかれないで…。

井深 そこが私の主張したいところなんです。幼児教育というのも、言葉を早く教えようとして、それを中心としてでき上がってきたんですけど、言葉以前の大変な、イルカじゃないけど、何かそういう能力を持っているとしたら、それを上手にひっぱり出して、そのままずっと、これからのラーニングにつなげていけばいいわけですよ。それを、そんなものはゼ口だとしちゃって、全く別のものを新しく始めているのが今までの教育学ですよ。

例えば、海中出産の子供たちというのは、ひと月も水になじませ続ければ、イルカと同じように泳げるんですよ。そういう持っている本能というか、アメーバから人間にまで育った、その遺伝子の、それをそのまま生かしてすぐに学習につなげたら、学習能力というのは、すごく進むんじゃないかというのが私の妄想なんです。

片山 『誕生を…』の本も、現場のお医者様の批評は聞いてませんが、おもしろいと言ってくださいるのは、やはり心理学の方とか…。

井深 心理学が1番だめ（笑い）、デカルトの科学万能的な影響を1番多く受けているのは、心理学と医学ですよ。土台の考え方がそうだから、心というものをなくしちゃって、物だけでやってきたのが医学ですよ。心理学は、それに乗っかっちゃってるから…。私は

そう解釈している。

今の脳生理学のシステムでは、意識とか心というのが分からないというふうに、左脳、右脳の研究で81年にノーベル賞をもらった、スペリー博士も言っていますね。

片山 脳の細胞の数も、1950年頃には10億ぐらいと言われていたのが、ついこの間までは100億ぐらいになり、今では1000億って言われているんですけどね。

井深 数を問題にしてもしょうがないんですけどね。

片山 それなのに、ほんの少ししか使われていない、その残りは何なんだという、まだ全然分かっていないというんですね。

井深 私はとにかく右脳から考える。子供の得意なまる暗記も、多分右脳に入るんですよ。それで、小さい時から、まる暗記をやっていたら、すごい右脳の刺激になる - 右脳というのは、6歳までの間に何か刺激を受けなきゃ育っていかないんですが、それから後は左脳の世界に入って行く。なぜなら、言葉が定着しちゃうと、俄然、左脳刺激ばかりで、左脳が勝っちゃうんですよ、誰でも。合理的に物を考えちゃうんです。その前に何10%かの脳をまる暗記に使える、と私はそう思っているんですが。

ユダヤの人たちの教育がいい例ですね。これはもう、生まれた時からトーラとか、タルムードとか、そういうのをお母さんが大きな声で唱えているのを、音で暗記している。

日本人も、明治・大正の人は、素読ってものをすごくやったんです。その人たちの思想の幅というのは、まるで違うんですよ。

片山 ユダヤの人たちでおもしろいのは、小さい時に、言語的刺激がすごく多いということがあるんですね。19世紀末のオーストリアのウィーンには、たくさんユダヤの人たちが住んでいましたよね。フロイトなんかもそうですが、カール・クラウスとか多くの有名な文学者も出ています。

その人たちの特徴の1つがボヘミア(チェコ語)なんですね。ボヘミアに暮らしていて、生まれるか生まれないかの時点でウィーンに引っ越した人がすごく多いんです。それで言語環境が、チェコ語とドイツ語とユダヤの昔の言葉のヘブライ語と、3つが混然一体となった中で暮らしているんです。で、非常に言語的に鋭い。それで、すごい人たちができるんですよ。

井深 いや、私もそれ、非常に気にかかっているところ。

アメリカにいるユダヤ人も、日常生活は全部英語でやっているわけですけど、そういう教典の暗唱はヘブライ語。初めからバイリンガル、トライリンガルでやるわけです。それは音楽でいえば、繰り返し聴いていて、バッハとシューベルトをちゃんと聴き分けているのと同じ感覚だろうと思うんですよ、語学というのはね。だから、字から覚えていく前に、音で入れていかなきゃうそだと私は思うんですよ。

片山 でも、赤ちゃんの能力の大きさについて、今やっと大っぴらに言えるようになったというんでしょうか、迎え入れる空気ができたというんでしょうか・・・。

井深 ばかにされなくなった。

片山 ばかにされなくなった、ほんとうに（笑い）。白い目で見られなくなったというふうに、チェンバレン先生も書いておられますが。

井深 私も3年前に“気”の話をしたら、「あいつは何を言っているんだ」と思われましたからね。

片山 今はもう、刻々と変わりますよね（笑い）。

井深 でも、それから比べたら、ほんとに病院の新生児の取り扱いなんかは、1つも変わらないですね。

誰にでもある“誕生の記憶”

井深 片山さんの翻訳、おもしろいものばかり手がけていらっしゃるのね。

片山 人体科学というか動物の科学、生命の科学というか、大体そんな分野のようですね、全体的に見ますと。

またイルカの話になりますが、『イルカの会議』という本の中にもちょっと出てくるんですけど、トレーナーの人が、イルカにいろいろ芸を教えますでしょう。すると、あるとこ、必ずイルカのほうに主導権が移ってしまうんだそうです。そしてイルカのほうから「こんなのはどうですか」というぐあいになる（笑い）。それで、イルカのトレーナーは、みんな口をそろえて、「イルカが私をトレーナーにしてくれたんです」と言う。そう実感するんだそうですよ（笑い）。

よほどイルカというのは、人間の気持ちが分かって、先を読んで、いろいろ向こうから話しかけてくれるんじゃないでしょうか。

井深 どうもそうみたいだな。

とにかくイルカのほうが、人間より先に、人間より高いレベルに着いていたことは間違いない。何を高いレベルと言うかは、別問題としてね。

片山 そうですね。

井深 胎児や新生児の能力については、トマス・パーニーさんの『胎児は見ている』をはじめとして、いろいろ断片的には知っているんだけど、これはもう特別なことではなくて、全部の人が、ほとんど例外なしに持っているのだということを訴えていますね、チェンバレンさんは。

片山 そうですね。でも、書評には「やっぱり覚えているのは、特殊な人だけじゃないか」「三島由紀夫みたいな天才のような人だけじゃないか」というふうにお書きになった方もいらっしゃいましたね。

井深 いや、チェンバレンさんはそうじゃない、誰にでもあるということを言っているんですよ、一生懸命（笑い）。

胎児、新生児期の能力に関しては、やっぱり、今後も実際に起こったことをどんどん羅列していくよりしようがない問題だと思いますね。

片山 それで説得をするしかないわけですね。セラピーなんかをなさる方の間ではもう、「誕生の記憶は常識」とおっしゃっていますが。

心の力というのが、すごく見直されてきているんですね。今読んでますのは、精神神経免疫学 - つまり、心で起きることが免疫系を介して作用することによって、それが治癒力となっていくんだという考え方の本なんですね。人間の体には、そもそも癒す力がもともと備わっているんだという考えなんです。

井深 それはもう、漢方の基本の考え方…。

片山 ええ。それを活性化させるのが心の力、精神、感情だと…。

心を抜きにして人間は考えられない

井深 心ってものを絶対に排除してやってきたのが、近代科学なんだけど、もう排除できないところまで来ちゃってるんですよ。極論すれば今の西洋医学じゃ、生命というものを論ずる資格はないと。

片山 新しい本を読みますと、ほんとうにそういう感じがひしひしと伝わってきますね、今。心を抜きにしては、何も人間のことは語れないみたいな。

井深 デカルトというのはクリスチャンでしたから、精神のほうが上に位するものだということは、非常によく分かっていた。

しかし、デカルトは自分がはっきり説明のできることでなければ言わない、というポリシーを持っていたんですね。デカルトは、論理学者であり、物理学者、思想家でもあり、哲学者でもあり、サイエンスも非常に詳しくわかったわけなんです。その上、数学者でもあるんですね。だから、どうしても、自分がはっきり言葉で説明でき、でき得べくんば数式で証明できる、そういうことでなければ言わなかった。そこに大間違いのものがあつた。それをニュートンがはっきりと、きれいに数式で説明しちゃつた。

それまでは哲学とか神学が世界観をリードしていたのが、すっかりひっくり返って、世の中の人々が全部、それが科学ということで無条件で信じちゃつたわけですね。

そして、それがずっと続いたわけなんだけど、物理学者のアインシュタインをはじめとして、20世紀に入ってすぐから、どうもニュートンの言っていることは、ある時期、ある条件の下では正しい。例えば地球上の重力の問題だけ論じていけば正しいけど、地球と太陽と月との関係になると、ニュートンの重力の法則では矛盾が出てくるというところから、量子学的な考え方が出てきた。

そのアインシュタインの理論もやがて問題が出てくることになっちゃうわけなんですけど…とにかく、それで、量子力学というのが確立する。そこで、デカルトとニュートンの立てた説は、物理学でははっきり、今までの考え方は一部分にしか当てはまらないものだという結論が出ちゃうわけです。

ところが、心理学でも、医学でも、経済学でも、社会学でも、ほとんど全部科学万能主

義。そこに不足している心というものを忘れちゃった。それに基づいてでき上がった学問は唯物的な学問としか言いようがないわけです。だから、これから、どうやって唯心論を入れていくかということになると、今までの科学的考え方をひっくり返さなければならぬということになっちゃうわけなんですよね。

片山 お話をうかがっていると、今とはすごく違う人間ができそうですね。

井深 だから、学校制度なんていうのも、大体私に言わせれば、6歳ぐらいまでに小学校の教育課程ぐらいは、今よりもうんと楽にできると思うんですよね。6カ国語だって7カ国語だって、やりようによっては、学校に行く前にもう……。

片山 全然違う能力を持っているんですから、私たちが感じるような苦勞は全くないわけですね。

井深 多分、全然ない。我々が日本語を覚えるのと同じにできちゃうわけなんですよ。

片山 それはほんとうに得なことですね。

井深 得なことなんです。

片山 むしろそういう能力を開発しないでいるほうが、ほんとうにもったいないし……。

井深 そうなんです。大げさに言うと、チェンバレンさんの言っていることが、みんなにそのまま通用しないところに大きな問題がある。

今日はどうもありがとうございました。またおもしろい話を聞かせてください。

おわり